

内閣府特命担当大臣(こども政策担当)賞

小学生の部



「今、僕にできること」

一宮市立丹陽南小学校
おおぬき なぎと
 5年 大貫 胆翔さん

僕には、医療的ケアが日常的に必要な従弟がいる。名前は龍聖君。今年の四月に小学一年生になった龍聖君は、五年前、原因不明の突然の心停止が原因で、低酸素脳症になり、寝たきり状態になった。しゃべることや、自分の意思で体を動かすことができない龍聖君は、気管切開や胃ろう、痰の吸引などのケアが必要で、龍聖君の両親や訪問看護師さん達にお世話をしてもらいながら、生きている。

僕と二つ下の弟は、龍聖君と外出するのが大好きだ。今まで、さまざまな場所に一緒に出かけた。ファミリーレストランやショッピングモール、動物園や

遊園地、ホテルに泊まって一緒に温泉に入った事もある。龍聖君と出かける時は、命をつなぐ機械を乗せたバギーに龍聖君を乗せて出かける。機械以外にもタオルなど、たくさん荷物と共に移動する。

ある時、ショッピングモールで龍聖君のバギーを押しながら歩いている時、たくさんの視線がこちらに向けられている事に気がついた。どきっとして見わたすと、どの視線とも目が合わない。皆、龍聖君の事をじろじろと見ていたのだ。中には指をさしている人もいた。僕は思わず、早足でバギーを押した。

何だか胸の中がじりじりして、嫌な気持ちになった。どうしてじろじろと見てくるんだろう。見てきた人たちは、自分もじろじろと見られたら、嫌な気持ちになるんじゃないかな。僕は龍聖君の手をさすりながら、

「大丈夫だよ、大丈夫だよ。」

と何度もつぶやいた。そして、考えた。なぜ、街の人たちは龍聖君の事をじろじろと見てくるのかを。

もしかしたら、皆、龍聖君みたいな医療的ケア児を見たのは初めてだったのではないか。知らないか

ら興味がわいて、見てきたのではないか。確かに僕自身も、初めて見るものには興味がわいて、いろいろと見てしまう。今日感じた視線も、そんな気持ちだったのかもしれない。

では、どうしたら安心して外出できるのか僕なりに考えた。世の中には、龍聖君のような医療的ケア児がいること。外出する時は、命をつなぐたくさんの機械や荷物と共に、バギーに乗ること。痰の吸引をしなければいけないこと。それらを人々に知ってもらえれば、視線の感じ方も変わるのではないだろうか。そのために、僕が今できることは何だろう。

僕はまず友達に、龍聖君のことを紹介しようと思った。龍聖君の体のことや、医療的ケアのこと。どんな反応が返ってくるかは分からないが僕は笑顔で紹介したい。少しずつかもしれないが、行動をおこせば、必ずいつか世の中は変えられると僕は思っている。

どこかで医療的ケアが必要な人に会ったら、どうか好奇の目でじろじろと見ないで、温かく見守って欲しい。安心して暮らすことができるよう、僕は今できることをしよう。